

定住化の時代における地縁共同体の構築 —フランス南西部に暮らす移動生活者マヌーシュの 共同体を事例として

左地（野呂）亮子

1. はじめに

近年の人類学研究において、共同体をめぐる概念再考の動きがみられる¹。この背景として、人、モノ、資本の流動性や断片化を伴うグローバル化が進行する現代社会において、親族ないしは地域社会といった従来の人類学が依拠していた静態的な社会的、空間的枠組みを自明視できなくなったことがある。同質で固定的なアイデンティティによって規定される共同体ではなく、社会の動態性の中から新たに生じる異質な関係性を含み込んだ共同体概念の検討が必要とされているのである。

こうしたなかで、日常の生活実践を重視して共同体概念を再定位する試みがある。人類学者の小田亮は、全体性や単一性ではなく、内部に異質な諸関係や差異を抱えた「非同一的な共同性」に基づく共同体が、日常的でローカルな生活世界においてどのように作りだされ維持されているのかを明らかにすることが重要だと述べる [小田 2004]。「非同一的な共同性」²とは、「そこから生活の都合に応じてさまざまな境界をもつ共同体がそのつど強調され、選択されるような場」[*ibid.*: 245]であり、小田は、そうした共同性に支えられた共同体を、「生活の場に再領土化され」、日常生活のなかの絶え間ないコード変換によって「場の意味を変えながら同時に、その空間を閉じたり他の空間とつなげたりしている」、「閉じていながら開かれている共同体」として考察する [*ibid.*: 241-243]。同様に、人類学者の松田素二も、人々が生活の便宜や変化への対応の必要性から様々な共同体をたちあげていることを指摘し、新たな共同体概念の探究に向けて三つの要点を挙げる。第一に、共同体は、自然で固定的なものではなく、歴史的条件のもとで生成され更新される動態的な特徴をもつこと、第二に、共同体は、単なる言説的な構築物でも、アイデンティティを要請しないその場その場の創発性の産物でもなく、明確な境界とアイデンティティを成員に要請するリアルな存在であること、第三に、共同体は、明確な境界とアイデンティティを再生産する一方で、実際において変異と流動性をつくりだし続けるということである [松田 2004: 264]。

このように近年新たに提起されている共同体概念は、非歴史的で静態的な共同体像から脱却し、「生活の場における実践の論理」[小田 2004: 242]を通して人々が

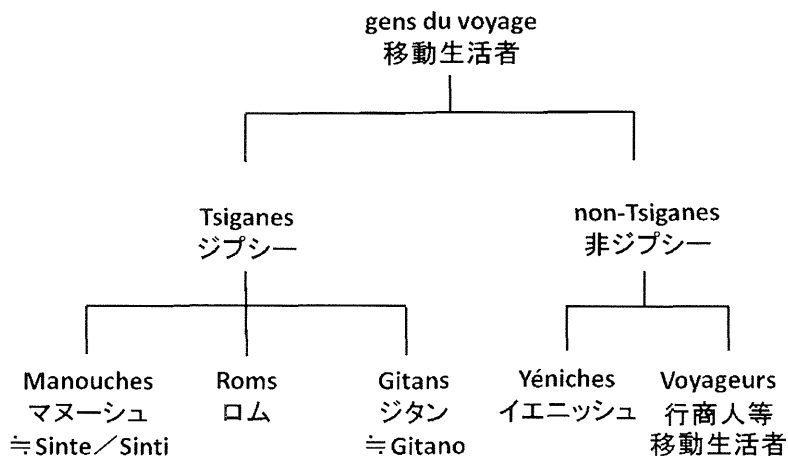
共同体を構築、再構築する動的な過程を照らし出すものとなる。本論文では、こうした人々の生きる生活の場に根付いた共同体構築の過程を、第二次世界大戦後、定住化をめぐる社会変化に直面してきた移動生活者マヌーシュの共同体構築の事例を通して理解することを試みる³。

フランスに暮らす「マヌーシュ Manouches」は、一般的に、「移動生活者 gens du voyage」、ないしはフランス語で「ジプシー」を表す「ツイガン Tsiganes」と呼ばれている（資料1参照）。彼らは定住農耕民社会の只中にいながらも、その共同体に属することなく、国境を越えて移動し、訪れる先々で様々な経済活動をおこないながら暮らしてきた人々である。しかし、フランスで第二次世界大戦後以降に急速に進行していった都市化と高度成長の影響を強く受け、今日、多くのマヌーシュが移動生活を縮小し、都市の周辺にある宿营地や空き地に「キャラヴァン（牽引式のキャンピング・トレーラー）」をとめて、一年の大半を定着して過ごすようになっている。

定住化という生活様式の変化に伴い、マヌーシュは、移動生活の様態と密接にかかわり組織されていた共同体のあり方も変化させている。従来の研究では、マヌーシュは、移動のたびに離合集散する親族を成員とした共同体を形成するとされていた。これに対し、本論文が事例とするフランス南西部ポー Pau 地域（資料2参照）⁴のマヌーシュは、1960年代から進行した定住化の過程で、「血縁」に代わる「地縁」という新たな関係性を発展させた。人々が、「ポーのマヌーシュ」、もしくはフランス語の 'communauté' という言葉を用いて「私たちの共同体」と表す、地域に根ざした新たな共同性がみられるようになったのである。

本論文では、このような地域的な共同性のもとに築かれた共同体を「地縁共同体」と呼ぶことにする。そして、マヌーシュが、移動から定住へと変化する生活の中で、

資料1 ジプシー／移動生活者の集団範疇



どのように共同体の境界や内部の社会関係を維持、変化させ、新たな共同体を形成していったのか、その過程を追う。とりわけ、移動生活の時代に入々が慣れ親しんでいた柔軟な集団編成のあり方が、定住化をめぐる新たな生活条件にどのように対応していったのかという問題を探る。そこから、地縁共同体が、単に社会的環境の変化という外的影響をうけて生じたのではなく、変化に適応したマヌーシュの人々の暮らしのダイナミズムのなかから生み出されてきたことが明らかになるだろう。

まず、マヌーシュの集団編成の特徴を、先行研究と調査地の事例から説明し、それを「柔軟性の原理」として提示する。この原理は、日常生活の具体的な経験に応じて集団の枠組みを変化させるものである。次に、マヌーシュの駆け落ち婚の事例に着目して、マヌーシュが、定住化の時代におけるキャラヴァン居住という新たな生活条件のもとで地縁関係を発展させていった過程を検討する。最後に、人々の現在の生活状況にふれながら、地縁共同体が、「柔軟性の原理」に基づいて構築されたがゆえに、今日においても、安定した社会関係の固定化へと方向付けられることなく、進行する社会変化の中で緊張や葛藤をはらみ、絶えずその境界や内外の社会関係を更新していく動的な特徴をもつことを論じる。

2. マヌーシュ共同体の特徴

定住化を契機として、調査地ポーのマヌーシュは、同じ時代に同じ地域に定着していったマヌーシュや非マヌーシュと密接な社会関係を結び、地縁共同体を構築した。しかし従来、マヌーシュの共同体は、集団編成が流動的であり、親族集団の集まりを超えた大規模な共同体へと発展することがないと考えられてきた。こうした定住化以前の共同体のあり方は、今日の地縁共同体にどのように作用してきたのだろうか。ここではまず、移動生活と密接に関わるマヌーシュの社会組織のあり方を

資料2 調査地の位置



説明し、その集団編成の特徴を「柔軟性の原理」として提示する。

2.1. 移動生活の時代におけるマヌーシュ共同体

フランス南西部ポー地域に暮らす移動生活者人口は、約 1200 人と推計されており [Département des Pyrénées-Atlantiques 2003]、その大部分が自らをマヌーシュと呼ぶ人々である。彼らの多くは、1960 年代以降に、ポー地域の空き地や公営の集合宿営地に定着し始めた。これらのマヌーシュ家族に、彼らや彼らの親族が活発な移動生活を続けていた 20 世紀前半に暮らしていた地域について質問すると、フランス国内外を問わず、実に様々な地名が挙がる。六角形の形状をもつフランス本土全体を広範囲に移動していた家族、マッシフ・セントラルを經由してラングドック＝ルシヨン地域圏やミディ＝ピレネー地域圏を移動していた家族、さらにはイタリアを経てフランス南東部から南西部、そしてスペインにかけての地中海沿岸地域を中心に移動して暮らしていた家族がいる。このように広域を活発に移動する生活を送りながら、マヌーシュの人々は共同体を形成していた。

2.1.1. 共同体の概念

マヌーシュは、血縁により結びつく数世代の夫婦からなる拡大家族集団を集団編成の最小単位とし、そこに血縁・姻戚関係で結びつく複数の拡大家族集団が融合することで移動や居住の単位となる共同体的なまとまりを形成すると考えられてきた [Dollé 1980; Reyniers 1992]。そこでまず、拡大家族集団の集合体を、マヌーシュ社会における共同体的結合の基本的な形態とみなすことができる。しかし、先行研究では、マヌーシュの共同体は、集団編成が流動的で、メンバーシップの範囲も明確ではなく、捉えがたいものだとも指摘される。

ベルギーの人類学者レイニエールは、1970 年代から 80 年代にかけてベルギーのシンテ *Sinte* / マヌーシュ集団⁵を調査し、公文書から収集した系譜記録をもとに、彼らが形成してきた共同体の変遷を追った。レイニエールによれば、シンテ / マヌーシュの社会組織は、第一に *familia* と呼ばれる夫婦とその子どもたちからなるもっとも基礎的な単位、第二に *menše* と呼ばれる同じ祖先をもつ複数の夫婦の集合、最後に血縁関係が実際にたどれなくとも、多かれ少なかれ顔見知りであり、接触のある同じ民族集団、もしくは親族関係の総体である *leute* からなるという [Reyniers 1992: 91]。だがその一方で、レイニエールは、シンテ / マヌーシュが、「共同体 *communauté*」という概念を正確に表す言葉をもたないとして次のようにも指摘している。「共同体」の概念は完全な形ではあらわれない。この概念は「われわれシンテ *māre Sinte*」や「私たちのところにいる人々 *menše fun i paš mende*」という表現によって間接的に示され、まず親族関係にある人々を指し、そしてそのほか

の近い関係にある人々を指す」[*ibid.*: 241]。

フランスのマヌーシュに関する研究でも、マヌーシュ共同体は親族関係にある複数の拡大家族集団の集合体として捉えられているが、その外縁は明確ではなく、その上、固定的で大規模なものとはなりえないと指摘される。1970年代にアルザス地方に暮らすマヌーシュ集団を調査した作家のドレは、フランス語で「拡大家族」と訳される「ファミリア *familia*」が姻戚関係によって二つ、稀に三つ融合したものが人類学でいう「クラン」にあたる集団を形成すると述べている。そしてドレは、「ジプシーは実際にはあまりに過度な密集に対してアレルギー反応を示す。だからファミリアのなかで旅をし、クランの残りとは大きな行事や結婚、誕生、葬儀の際に再会することを好む」と指摘し、マヌーシュ社会においては拡大家族集団（ファミリア）が自律的な単位として日常生活を営み、複数の拡大家族からなる共同体的なまとまり（クラン）はゆるやかな連帯にとどまることを示唆している [Dollé 1980: 99-100]。

2.1.2. 集団編成における「柔軟性の原理」

このように先行研究において明らかにされてきたマヌーシュ共同体の特徴であるが、それはマヌーシュの移動の生活様式と深く結びつくものであった。ルーロットと呼ばれる家具馬車やキャラヴァンに暮らし、マヌーシュが活発に移動していた時代、土地に定着する農耕民の社会のように恒久的で境界の明確な共同体は形成されにくく、集団の枠組みは移動に伴って常時変化していくものであった。

マヌーシュとしては非常に稀である自伝を残したドエールの著作 [Doerr 1982] の中に、19世紀後半から第二次世界大戦後までのマヌーシュの移動生活の様子が描かれている。その記録によると、ドエールが属していた移動集団は、移動のたびに、彼の両親、祖父母、曾祖父母の世代から血縁・姻戚関係にあるマヌーシュ親族集団との融合と分離を繰り返していた。一時的によそ者の移動生活者家族と経済的な同盟関係を結ぶことはあっても、親族関係を越えた共同体的なまとまりはみられなかった。そして広範囲の移動に伴い、旅を共にする移動集団の一部が抜けたり、普段は別の経路を移動して暮らすマヌーシュ親族と再会し、新たにその一部が移動集団に加わったりと集団編成は随時変化した。

レイニエールは、このような移動生活の中で形成される共同体を支える要素として、「親族関係」と「テリトリー」を挙げているが [Reyniers 1992: 243]、とりわけ、マヌーシュたちのような移動民にとって社会組織の鍵となるのは、テリトリーとの関係性だといえる。マヌーシュのテリトリーは、定住民社会におけるそれとは異なり永続的なものでも制度化されたものではないが、だからといって無秩序なものでもない。マヌーシュのテリトリーとは、親族が定着もしくは移動していたり、親族

の墓があったり、彼らがその地域内で経済活動をおこない、経済取引の相手である「定住民 *gadjé*」⁶や行政手続きのために彼らを支援してくれる定住民がいたりするという理由で、マヌーシュ家族の移動生活における安定した社会的、経済的基盤となり、集団編成の重要な基盤となる一定の地理的空間を指す。しかし同時に、彼らのテリトリーは、新たな移動経路の開拓に伴い変更される可変的な特徴をもち、旅を共にする移動集団もその度に集団構成を変化させることになる。つまり、マヌーシュの共同体は親族的紐帯を基盤としながらも、テリトリーの可変性により、集団の枠組みを固定化することがなかったのである。

このような可変性に富むマヌーシュ共同体の特徴を、レイニエールは「構造的な柔軟性 *flexibilité structurale*」[Reyniers 1998: 119]という言葉で表している。マヌーシュは、社会統制のために集団内部の政治的組織を発展させたり、家族集団間の正式な協働関係を婚姻制度などを通じて組織化したりすることがなかった。マヌーシュは、成員の権利義務を規定して集団内部の構成を固定化、安定化させたのではなく、むしろ移動生活の中で絶え間なく生じる融合と分散によって柔軟に集団編成を変化させてきたのである。

さしあたって、こうしたマヌーシュ共同体を特徴づける集団編成のあり方を、「柔軟性の原理」として、次のようにまとめることができるだろう。移動生活の時代におけるマヌーシュの共同体は、親族関係に基づくが、系譜や義務関係を通して明確に規定され固定化された成員によって形成維持されていたのではない。メンバーシップの範囲は不明瞭で、かつ日常の生活条件に応じて非常に柔軟に変化していた。移動と離合集散により成員の流動性が高いため、その共同体的なまとまりが永続的で固定的な集団形態をとることはないのだ。共同体やそれを構成する家族を取り巻く社会経済状況の変化、それに伴う地理的な移動によって、基礎的単位となる拡大家族集団は個々の状況に応じて、従来の共同体から一時的ないしは決定的に分離したり、別の家族集団と融合したりして新たな共同体的まとまりを再構成していたのである。

2.2. ポー地域におけるマヌーシュ家族の集団編成

ここまで移動生活の時代におけるマヌーシュの集団編成の特徴を説明してきたが、生活条件に応じて集団の枠組みを変化させるという「柔軟性の原理」は、今日ポー地域に定着するマヌーシュの共同体の形成にどのようにかわるのであろうか。調査地のマヌーシュは、第二次世界大戦後にはじまり、1960年代以降急速に進行していった定住化とともに移動の生活様式を大きく変化させたが、彼らの集団編成にも、同様の「柔軟性の原理」をみてとることができる。

2.2.1. 拡大家族のまとまりと状況適応的な集団選択

調査地のマヌーシュが話すマヌーシュ語の「ファミリア *familia*」は、「家族」と訳されるものである。ポー地域のマヌーシュ共同体においては、先にレイニエールが *menše* や *leute* として挙げたような、「ファミリア」よりも大きな集団形態を指す言葉が存在せず、彼らのいう「ファミリア」は、文脈ごとに、「核家族」も「拡大家族集団」も、さらには「共同体」をも表す言葉となる。つまり、この言葉は父方、母方双方の曾祖父母、祖父母のまわりにあつまる血縁集団を指す一方で、実際の系譜関係は明確ではないが、自分の血縁者や配偶者と親族関係にある人や、多かれ少なかれ古くからの顔見知りであり、接触のある人といった広義の社会関係の総体を指すこともある。

したがって、「ファミリア」概念をもって、調査地のマヌーシュの社会組織を分類することは難しいのだが、現実の日常生活における様々な活動を通してもっとも綿密な結びつきをもつ安定した集団の形態は、拡大家族集団である。拡大家族集団は、一組の夫婦を中心に、その子どもたち夫婦や孫たちといった、三世代から四世代にわたる家族を主たるメンバーとしている。一組の夫婦と未婚の子によって構成される個別家族は、単独で日常の居住空間を構成することも、長期の移動をおこなうこともない。子は結婚し、自ら子を幾人ももった後も、親の家族集団のもとにとどまり、共に移動生活に出かける。

このように、ポーのマヌーシュ社会では、拡大家族集団が移動と居住の基本単位であるが、それは父系や母系の原理で固定化された排他的な集団とはなっていない。夫婦が結婚するとどの家族集団に統合されるのか、という問題は状況適応的な選択による双系出自の原則に基づき、結婚後にどちらの親、親族のもとに暮らすかといった選択が二者択一的な帰属集団の選択へと結びつかない⁷。ポーのマヌーシュは、母方と父方の親族のどちらか一方を特別視することもなければ、直系と傍系を区別する親族名称ももたない。第一子や男女のどちらか一方の子やキョウダイ関係を特別視することもなければ、子のうち誰が老齢の親の世話をすべきかという規則ももたない。財産分与ないしは相続に関しても、親は死後ほとんど財産を残さないもので特別な規則もない。

子夫婦は、一方の親が住む居住地にはキャラヴァンをとめるスペースがあるとか、堅密な関係にある近親や同性のキョウダイがいる、または居住地の環境設備が好ましい、子夫婦以外に親と同居する家族がないなど、その時々に変化する生活条件に応じて居住地を選択する。多くの場合、占有権をもたない土地にキャラヴァンをとめて暮らすマヌーシュの居住条件は、居住地の環境、夫婦やその親の経済状況といった現実的な様々な要因や制限に左右されやすく、居住地選択も不規則的になるのだ。また、マヌーシュの母親たちに話を聞くと、「理想」は「夫婦双方の両親

のもとで交互に住むこと」、つまり半年や数ヶ月といった期間で夫婦が双方の家族集団のもとに交互にとどまることだという意見が多く聞かれた。結婚すると夫婦はどちらかの親のキャラヴァン区画の近くに別のキャラヴァンをとめ、彼らの親を中心とした家族集団に合流することになるが、この選択は永久的なものでもなければ、夫婦の片方がもともとの親族のつながりを絶つわけでもない。半恒久的に一方の親の居住地に暮らしている夫婦でも、もう一方の親との結びつきを常に密に維持し、状況に合わせてその親の集団と一時的に合流することも非常に多く、どちらか一方の家族集団に子夫婦の集団帰属が決定づけられることはない。

以上、調査地の事例からは、マヌーシュの個人が、共通の祖先に連なる縦関係の系譜の中に固定されることなく、状況適応的に、そして双方向的に自らの親族ネットワークを拡大していく傾向がみられる。子からみると、父か母の一方の親族集団の中で恒常的に暮らしていたとしても、潜在的には父と母の二つの家族集団への帰属可能性をもっているといえる。このような集団帰属の二重性は、マヌーシュの拡大家族集団における既婚の子とその家族を単位とする個別家族の自律性を指し示すものとなる。個別家族は、二つの拡大家族集団に帰属しながら、生活条件に応じて居住集団を選択し、なおかつ、その選択には一年を通して流動性がみられるのである。

拡大家族集団は、世代の異なる複数の家族が日々の相互扶助や協働をもっとも頻繁に繰り広げる場である一方で、個別家族の生計や移動の行使に何らかの強制力をもって介入することはない。むしろ、マヌーシュは、彼らが生きる不安定な社会経済状況の中で、個別家族ごとに自律的に行動し、集団編成を常に流動的な状態に保つことで、個々の家族の暮らしの安定化をはかる。拡大家族集団は、こうした個別家族の生活を日常的なものや取りや非常時の扶助等を通して支えるセーフティネットのような役割を果たすといえるのだ。

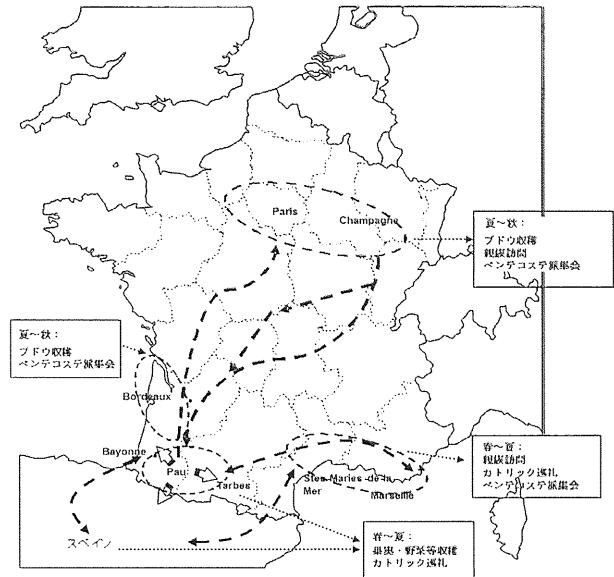
2.2.2. 拡大家族を超えた共同体的結合と定住化による変化

こうして親子の関係を軸とした、複数の世代からなるゆるやかな集合体として、マヌーシュの拡大家族集団を特徴づけることができる。先行研究でも指摘されていたように、この拡大家族集団は、さらに複数の拡大家族集団と結びついて共同体的なまとまりを構成する。

ドエール家の移動生活時代から近年に至るまでの親族集団の離合集散の事例では、近隣か遠方かを問わず、合流し分散する複数の拡大家族集団からなる親族ネットワークがマヌーシュ共同体の基盤となっていた。調査地のマヌーシュもまた、季節限定的なものとはいえ、現在でもキャラヴァンで移動生活をおこない（資料3参照）、離れて暮らす親族との結びつきを維持している。バスク地方やミディ地方など近隣に住む親族とは成員の誕生や洗礼、病気や事故に際した見舞い、結婚式、葬

儀、キリスト教の祝日や墓参りの機会に行き来する。パリ圏やフランス南部一帯に散らばって住む遠方の親族との再会はこれほど頻繁ではないが、春から秋にかけての移動の時期に合わせておこなわれる。このようなフランス各地への長距離の移動は、近隣地域に日帰りで行く場合とは異なり、現金収入の獲得や宗教活動を主要な目的としているが、結婚や葬儀の折を除くと普段接触することのない遠方の親族と再会する重要な機会ともなっている。

資料3 現在の移動生活状況



このように、調査地のマヌーシュが、再会の機会を減少させたものの、近隣遠方を問わず、旧来の親族の結びつきを維持していることが確認できる。しかし、これまで述べてきたように、マヌーシュの親族ネットワークは、夫婦を中心に双方向的に広がるので、夫婦それぞれの親族関係に沿って多様な関係にある人々を「ファミリア」の中に受け入れる柔軟性も持っている。そのような仕組みの上では、親族ネットワークは自然と拡大し、そして境界もあいまいにもなる。加えて、マヌーシュの社会組織には、集団の凝集性や連続性を保証するような組織化や制度も不在である。定住化する現在でも、親族との再会のために移動がおこなわれ、マヌーシュの個々人や家族によって親族のまとまりや連帯が意識されているにもかかわらず、親族組織内部で成員間のヒエラルキーもなく、親族を統率する政治的なリーダーもいないマヌーシュ社会には、日々の暮らしの中で、地理的に散在している親族集団の成員全体をしぼる強い統制があるわけではない。日常の生活条件に応じて、集団編成はたやすく変化するのだ。

こうした「柔軟性の原理」に基づく、拘束力の弱いゆるやかな親族の共同体的まとまりを維持しながら、マヌーシュは、定住化の時代において地縁共同体を構築した。移動の機会が減り、一年の大半を定着地で過ごすようになるにつれ、マヌーシュは、それまで離合集散を繰り返しながらも綿密な社会関係を保ってきたフランス各地にいる親族との接触の機会を減少させ、その一方で、時期を同じくしてポー地域

に定着し始めた非親族のマヌーシュや非マヌーシュとの社会関係を発展させていったのである。次に、マヌーシュの婚姻実践の事例を通してみていくように、ここでは移動生活の時代から持続する集団編成の原理が、定住化という異なる生活条件のなかで別のかたちであらわれ、地縁に基づく新たな共同体形成を導くことになった。

3. 定着地におけるキャラヴァン居住と駆け落ち婚

今日、ポー地域のマヌーシュは、他の地域に暮らすマヌーシュ集団やロムやジタンなどの他のジプシー集団と区別して、自らを「ポーのマヌーシュ」といい、そして「この土地のマヌーシュ」は「皆が知りあい」、「私たちはファミリア」、「私たちは共同体」と表現し、地域的な共同性に言及する。このような本論文が注目する「地縁」に基づくマヌーシュ共同体のあり方は、これまでのマヌーシュ研究において議論されることがなかった。ドレやレイニエールの研究では、移動生活の中で離合集散する血縁共同体が明らかとされていたが、定住化をめぐる社会変化の中で、新たなかたちで紡ぎあげられるマヌーシュの地縁関係は触れられていない。この理由については、次の二点を指摘することができる。まず、本論文が対象とするポーのマヌーシュ共同体の形成は、1960年代以降の定住化がもたらした生活空間と社会関係の固定化による影響が顕在化した近年の現象であり、先行研究の調査がなされた1970年代から80年代の間に同様の状況を十分に観察することは難しかったということ。また、ポーのマヌーシュ共同体は、後で述べるように、多様な出自をもつ非マヌーシュが混入していったポー地域独自の社会的な背景があって形成されたのであり、今日、フランスやヨーロッパ各地で、マヌーシュが同様の地縁共同体を形成しているわけではないためである⁸。

しかし、時代と地域を限定した社会的条件という外的要因だけが、新たな共同体の構築に関わるのではない。この「地縁」というマヌーシュの地域的な共同性が紡ぎあげられていく過程には、彼らが移動生活の時代から保持していた柔軟な特徴をもつ集団編成の原理が大きく影響していると考えられるからである。そこでここでは、ポー地域のマヌーシュの定住化初期の共住経験とそこで生じた駆け落ち婚に着目し、マヌーシュが外部の他者を排除する閉鎖的なシステムに依拠することなく、反対に、日常の生活の場で育まれる社会関係に基づいて、多様な個人を集団内部に引き入れ、「ポーのマヌーシュ」という集団範疇をつくりあげてきたことを示していく。

3.1. 定住化初期の共住と地縁の創出

調査地におけるマヌーシュの地縁関係の発展は、彼らの定住化が始まる1960年代にまでさかのぼる。都市化が進み移動生活が難しくなっていったこの時代に、ポー地域周辺を移動して暮らしていた多くのマヌーシュが、ポー市郊外に1967年に建設されたキャラヴァン居住者のための公営宿营地「SC集合宿营地」にとどまることとなった。そして、このSC集合宿营地に暮らし始めたマヌーシュ家族のもとには、当時、移民の急増と大規模な都市化により社会的環境が悪化していたマルセイユ地域からやって来たマヌーシュ親族が徐々に合流していった。これらの家族は、20世紀前半にマルセイユを本拠地として南仏やスペインを移動して暮らしてきた家族集団である。また、彼らとは別に、ポー地域には、フランス全土にわたる広範囲の地域を移動していたフランスのマヌーシュ家族や、南仏やスペインから移住してきたジタンやヒターノ家族も集まり、彼らもまたSC集合宿营地やその周辺の野営地にとどまるようになっていた。こうして同時代に定着を開始した家族の多くは、ポー地域を定着の地としながらも、1980年代中頃までは一年の半分を移動して暮らしていた。だが、徐々に定着期間が延長されるようになり、1990年代には移動生活は季節限定的で単発的なものとなっていった。

このように定住化が年々進むなか、1996年まで存在したSC集合宿营地は、調査地のマヌーシュ家族が今日形成している地縁共同体の出発点となった。人口過密と荒廃に見舞われてSC集合宿营地が閉鎖されて以降、ポー地域のマヌーシュたちは、新たに建設された四つの公営集合宿营地、一時的ないしは恒久的な不法占拠地、私有地に分散して暮らす。筆者は、これら地域内の様々な土地に暮らすマヌーシュ家族に聞き取り調査をおこなったが、ほとんどの家族がSC集合宿营地に長期的もしくは一時的に居住していたと述べ、この宿营地で、現在10代から40代になる子どもたちの多くが生まれ、結婚していったことも確認できた。たとえば筆者の質問に対して、50代のマヌーシュ女性は、SC集合宿营地の暮らしを振り返りながら次のように説明した。「私たちは今でこそ別々の場所に住んでいる。けれど、みんなファミリアだよ。だってもともとはみんな同じところに住んでいて、そこで子どもたちが結婚して、それで別々の土地にいったんだもの。会えば挨拶もするし、何か困ったことがあれば助けてやる。だから私たちは共同体 *communauté* っていうんだよ。」SC集合宿营地での共住は、マヌーシュが、これまでの移動生活において一時的に接触することはあっても長期的な関係を結ぶことのなかったマヌーシュ家族やジプシー／移動生活者との社会関係を新たに開拓する機会となり、地縁共同体の形成に欠かせない経験だったのである。

地縁に基づく共同性は、定住化に直面するマヌーシュの人々が新たな生活の場をつくりあげていく上で必要不可欠な社会的基盤として、日々の暮らしの中で育ま

れ、意味づけられていったものである。たとえば次のように、マヌーシュは、半ば偶然に同じ定着地で共住することになった人々と、定住化が進行するなかで生じてきた居住をめぐる様々な困難に対して、連帯して協同することで対処してきた。

SC 集合宿営地は、設置当初、市によって管理運営されていたが、1980年代にはすでに管理を放棄されている。その背景には、市と宿営地住民との関係の悪化があったという。宿営地はキャラヴァンの慢性的な過密状態、それに伴う設備の損壊や衛生状態の悪化に見舞われ、こうした居住環境の問題に不満を抱く住民が、次第に運営者である市当局と対立するようになった。そして、住民が宿営区画の使用に関わる取り決めを無視したり、区画賃料や光熱費の支払いを拒否したりするようになると、市は管理人の派遣を停止し、宿営地の運営を放棄することを決定した。それ以後、SC 集合宿営地は、市からの社会的、物的なサポートが絶たれた土地となったが、このような状況下で、住民は宿営地を非合法的なかたちで「自治」の場とし、そこで生じる問題に対して共に協同して対応しようとした。たとえば、人々は、すでに共住する住民同士で宿営地の共同利用を認めあう一方で、新たに地域外から訪れる見知らぬ人々のキャラヴァン宿営を拒否し閉め出した。そうして彼らは、自らの居住の場を確保し、定着地での暮らしを安定させると同時に、定住化を契機として偶然に同じ土地を共有して住まうこととなった隣人との関係を密にして地域的な共同性を育んでいった。

3.2. 駆け落ち婚を通じた地縁関係の発展

このように、定住化という時代のなかで生活の場を新たにつくりあげていく過程で、ポーのマヌーシュは地縁を重要なものとして意味づけることになった。この地縁という社会関係で結びつく家族集団もまた「ファミリア」だといわれる。先に述べたように、血縁・姻戚関係の有無や遠近に応じてメンバーシップを正確に認知したうえで「ファミリア」の境界が指摘されているわけではない。近親でなくとも親族関係を拡張してたどっていくとなんらか姻戚関係があると想定されたり、長年同じ地域に共住し、よく顔を知ったものであったりするために自分たちは「ファミリア」であるというのであり、この場合の「ファミリア」は、長年近接して暮らし、定住化の時代におけるキャラヴァン居住という特定の経験を共有する人々同士の社会的紐帯を意味している。

ここには地縁に基づく新たな境界生成が認められる。従来の移動生活において、マヌーシュは、親族関係を越えた共同体的まとまりを形成することがないとされてきたのに対し、ポーの定着地においてマヌーシュは、旧来の親族ネットワークの外にいるマヌーシュや非マヌーシュとの社会関係を新たに築き、地縁共同体を構築した。

集団を構成する成員の出入りに関わる事象である結婚は、調査地のマヌーシュのあいだでは「駆け落ち」というかたちを取ることで、彼らの社会関係を地域的な広がりの中で拡大し、地縁共同体を動的に編成していく大きな要因となった。先行研究においても、マヌーシュ社会では、当事者の自由意志による駆け落ち婚が最も好ましいものとされ、慣習的におこなわれていることが報告されてきた [Dollé 1980; Omori 1977; Reyniers 1992]。筆者の聞き取り調査によると、マヌーシュの駆け落ち婚は、次のように展開する。若い男女は周囲に悟られぬよう愛を深め、ある日突然共に家族や親族のいる居住地を離れる。そのままカップルは一夜、もしくは数週間から数ヶ月にわたりマヌーシュ共同体から離れて二人だけで過ごし、その後に家族のもとへ戻ってくる。親は駆け落ちによって事後的に子どもたちの関係性と結婚の意志を知ることになるが、二人が戻ってくると、結婚の祝宴を開き、彼らにキャラヴァンを与える。そうして新たな世帯の誕生は家族から、またポー地域の共同体や、報告を受けて駆けつけた遠方の親族たちからも祝われることになる。

マヌーシュの親が子どもの結婚の意志を知るのは、駆け落ちという出来事が起こった後であり、親はその駆け落ちというすでに起こった事実に対し、結婚を事後承諾し祝う。つまり、事前の報告のないままに、結婚が本人たちの意思に委ねられるのであるが、結婚に際して親の反対が生じるということは稀であるとマヌーシュの親たちはいう。ここでは詳述できないが、駆け落ち婚において重要なのは、カップルが結婚の意志や婚前の交際の事実を隠すことであり、それをマヌーシュは、両親に対する敬意を示す行為とみなす⁹。マヌーシュの親は、子の駆け落ちの相手が付き合いのないマヌーシュや非マヌーシュである場合、しばしば落胆し、時に怒ることもある。しかし、結婚は必ず最終的に承認される。マヌーシュの娘は婚前に性交渉をもつことが厳しく禁じられており、男性と2人でどこかに外出したり、親密な交際をおこなったりすることは非難の対象となる。そしてそれがゆえに、処女喪失の経験とみなされる駆け落ちは、結婚の承諾を余儀なくさせるのである。したがって、親たちは結婚を好ましく思わなくとも、「起こってしまったことは仕方がない」と子どもたちが駆け落ちを終えて戻ってくるのを待ち、結婚式の準備を開始することになる。

調査地では、昔も今も、駆け落ちという結婚の方法は変わらないが、配偶者選択に関しては変化がみられる。たとえば、次のような例がある。

50代のマヌーシュ女性プッパ（仮名）は、彼女の夫との結婚の経緯について、「マヌーシュの結婚は自由だよ。親が強制するものではない」と前置きした上で、彼女の場合は、第二イトコの関係にある夫と彼女双方の家族集団が先の数世代にわたり親族関係にあり、幼い頃から移動生活や冬季の定着地を共にすることも多かったため、「自然と」結婚にいたったのだと説明する。このプッパ夫婦のような親族内婚は、

従来の研究でも明らかにされてきたとおり、マヌーシュ社会において最も一般的なものである [Dollé 1980; Omori 1977; Reyniers 1992]。しかし、彼女の現在 20 代と 30 代の子どもたちの世代となると、配偶者選択の内容は変化している。プッパには 3 人の娘（1 人は未婚）と 3 人の息子がいるが、プッパ夫婦と親族関係にある家族集団のなかで配偶者を選んだのは、長女 1 人だけである。既婚の娘 2 人のうちもう 1 人の次女は、ポー地域の宿営地で共住するまでプッパの家族集団と面識のなかったマヌーシュ家族の男性と結婚し、息子 1 人も同様に親族外のマヌーシュ女性と結婚している。あとの息子 2 人はそれぞれポー地域で知り合った定住民女性と結婚している。

このような配偶者選択の変化は、ポー地域のマヌーシュが定住化以降に経験した生活の変化と関係がある。移動生活の時代においては、駆け落ちをする相手は、共に移動をおこなう親族集団の内部や、巡礼や家族行事において年に数回集結する親族の中から選ばれていた。ドレの著書の中であるマヌーシュが「旅はわれわれの子どもたちを結婚させてくれる」 [Dollé 1980: 100] と語っているように、移動の先々での親族の集結はマヌーシュにとって配偶者選びの絶好の機会となったのである。

移動生活の時代においては、親族関係にある家族集団は一年の大半を離れて暮らしながらも、一年に数度再会、合流し、その機会に生じる若者同士の駆け落ち婚を通して家族集団間の結びつきを密にしていた。この場合、すでに付き合いのある親族と定期的に再会することで、若者同士の配偶者選びの範囲が決定付けられているので、結婚相手の選択に親の意向がはさまれなくとも、自然と結婚は親族集団内での関係強化となっていたといえる。これに対して、1960 年代以降に定着地で繰り返された駆け落ち婚においては、移動生活の時代のような自動的な家族間関係の調整は働かず、親族であろうがなかろうが、マヌーシュであろうがなかろうが、同じ居住地に住む若い男女が、親に知られずに結婚を決め、駆け落ちをしていった。先に説明したように、駆け落ち婚においては、当事者の婚姻関係成立に対する周囲の人間の関与は制限されていることが特徴である。したがって、家族間関係の強化という利点を見越して結婚が決められたのではなく、定住化に伴う生活空間と社会関係の固定化が、若者の配偶者選びに直接的に影響したのである。

このような背景のもとに、調査地では、これまでの移動生活における親族内婚とは異なった結婚が生じていった。スペインへ渡り、マルセイユや南仏を拠点に長らく暮らしていたマヌーシュ家族の子が、ポー地域で共住するまでは面識のなかったマヌーシュ家族やジタン家族の子と駆け落ちをするなど、親族か非親族か、マヌーシュか非マヌーシュかを問わず、地域内婚もしくは居住地内婚が増加した。

これまでマヌーシュ社会はしばしばエンドガミーであるとされてきたが [Dollé 1980; Omori 1977]、調査地の事例からは、マヌーシュの婚姻制度には、親族関係の

強化という目的のために同一の血縁成員の中に配偶者を求めなければいけないという慣習的な決まりがあるわけではないことがわかる。マヌーシュの間では、今でも居住地内で共に育った幼馴染や、イトコなどの親族集団の中から配偶者が選ばれることが多い。しかし、このことは、親族内婚を強いる固定的かつ排他的な婚姻規制が働いていることを示しているのではない。むしろ、マヌーシュ社会では、両親を同じくする兄弟姉妹の間以外に特に明確な婚姻規制がないこと¹⁰、移動生活やキャラヴァン居住といった独自の生活様式をもつことでよそ者が入り込みにくいことといった、少数の人口で構成されていた集団に特徴的な社会的な条件により、同一の親族間で婚姻関係が結ばれることが多かったというべきであろう。したがって、そもそも内婚を強いる規範があるわけではないので、結果として定住化が進む過程で、遠方の親族との結婚よりも地域内における結婚が増加していったのである。

3.3. 「ポーのマヌーシュ」という集団範疇

このように、ポー地域に定着したマヌーシュ家族は、定住化という新たな生活条件のもとで駆け落ち婚をおこなうことで、社会関係を地域内で拡張し、地縁共同体の枠組みをつくりあげていった。ここで注目したいのは、マヌーシュが非親族のマヌーシュばかりではなく、多様な出自をもつ非マヌーシュと婚姻関係を結んできた点である。この地縁共同体は、「ポーのマヌーシュ」という集団範疇を維持しながらも、定住民や非マヌーシュのジプシー／移動生活者といった他者に広くメンバーシップを開放してきた。

3.3.1. マヌーシュと非マヌーシュの混交

移動をおこない、定住民が形成する共同体に属さないマヌーシュは、メンバーシップが排他的で閉じられた集団を形成していると思われがちであるが、実際には、様々な非マヌーシュ出自の人間がマヌーシュの家系には混入している。調査地のマヌーシュに尋ねると、これは定住化の進む近年の現象でなく、昔からマヌーシュの間では様々な外見の異なる子どもが生まれることが珍しくないのだ、という答えが返ってくる。ともに黒髪で褐色の肌をもつ両親の間に生まれた子どもたちが、白い肌と金髪を混じった明るい色の髪をしていることがしばしばあるが、マヌーシュたちにいわせれば、それは「私たちは混ざり合っている」から何の不思議もないことなのである。実際にどの家族もさかのぼれば「定住民 *gadjé*」、もしくは非マヌーシュのジプシー／移動生活者の祖先がいるという。ある60歳のマヌーシュ男性は、マヌーシュの識字率の低いこの地域では珍しいのだが、祖先の記録を自ら調べ、スイス出身でサーカス芸人をしていた祖父が複数の妻をもち、そのうちの一人である定住民女性が自分の祖母だということがわかったという。彼の息子の一人も定住民女性と

結婚している。男性は「われわれマヌーシュは、長い間こうして混淆してきたんだ」と語る。

定住民との結婚は男女問わず、現代においてその数が増加しているが、貞操が重んじられるマヌーシュ女性よりも、行動や交友関係に制限を受けず日常的に居住地外に足を運ぶ機会の多いマヌーシュ男性と定住民女性との結婚が若者世代でも圧倒的に多い。筆者は、マヌーシュのキャラヴァン居住者を対象に調査をおこなったため、結婚によりマヌーシュ社会から離れ、「定住民」として暮らしているマヌーシュの数は不明である。とりわけ定住民男性と結婚したマヌーシュ女性は、定住民女性と結婚したマヌーシュ男性よりも、完全に定住し、マヌーシュ社会との日常的なつながりを絶つ傾向が高いといわれ、その正確な数を把握することはできない。このように想定される偏りを踏まえた上であえて推計すると、調査地では、おそらく5組のうち1組が定住民との結婚であるといつてよい。

また、定住民社会出身者以外の、様々な非マヌーシュとのあいだの結婚も数多い。調査地のマヌーシュや現在フランスに住む多くのマヌーシュは、本来、1870年に始まった普仏戦争の混乱のさなか、ドイツ語圏地域からフランス各地に移動していった「ドイツ系マヌーシュ」に属するとされる¹¹。ジプシー研究においては、フランスに暮らす、マヌーシュ（シンテ／シンティ）、ロム、ジタンに区別される三つのジプシー下位集団は、歴史的背景だけでなく生活様式、慣習、言語にいたるまでそれぞれに異なるといわれてきた。こうした異なる下位集団間の結婚について、ドレは、アルザス地方のマヌーシュが、定住民だけではなく、他のジプシー／移動生活者との婚姻関係を避ける傾向にあり、実際の婚姻数も少ないと報告している [Dollé 1980: 25]。ポー地域のマヌーシュの場合も、親は自分たちの子をできればマヌーシュと結婚させたいと語る。しかし、現実に生じている結婚の事例をしてみると、少なからずの非マヌーシュ出自の人々がマヌーシュとの結婚を通じてマヌーシュ共同体に混入していることがわかる。

特に、マヌーシュと歴史的に古い時代から密接な関係性をもっていたのは、「イエニッシュ Yéniches」である。イエニッシュは長い間フランスのアルザス地方をはじめとするドイツ語圏でマヌーシュ家族と居住地域を同じくしてきた、ヨーロッパ土着で非ジプシーの移動生活者集団である¹²。イエニッシュが今でも多く暮らすドイツやスイス、オーストリアなどでは、イエニッシュとジプシー集団との交婚はあまりみられないとされているが、アルザス地方をはじめとして、フランス全土ではマヌーシュとイエニッシュの結婚はこれまで報告されてきた [Bader 2007; Reyniers 1992]。調査地には、マヌーシュとイエニッシュの親をもつ80代の姉妹が暮らす。老姉妹は、マヌーシュの夫とのあいだで、それぞれ10人ほどの子をなしているのので、調査地には彼女たちの子孫が数多く居住し、ポー地域のマヌーシュの主要な家族集

団を形成している。

イエニツシュがドイツ語圏を起源として19世紀以前の時代からマヌーシュと交わってきた集団であったのに対し、南仏に大多数が居住する「ジタンGitans」やスペイン出身の「ヒターノGitano」は、20世紀に入ってから調査地のマヌーシュ家族と融合していった。調査地には、二度の世界大戦に挟まれた時代の混乱に際してスペインに渡っていた家族が多く、彼らは、第二次大戦後、スペインからフランスへと戻り、まずマルセイユやアヴィニヨンといった地中海沿岸の南東部に滞在した。そして、もともと定住するジタンの多く暮らすこの地域で、ジタン家族出身者と結婚し、ポー地域にやってきたのである。

さらにポー地域独自の背景として、スペインとの国境に近いこのピレネー山脈沿いのフランス南西部は、二つの大戦を経て国境間の移動が活性化された後にスペインから来たヒターノ家族と、地中海沿岸地域や南仏一帯から来たジタン家族が、同時期に地域に定着し始めたマヌーシュ家族と交叉する地帯でもあった。たとえば、調査地に暮らす45歳のヒターノ女性は、スペインで生まれたが、幼いころに両親と共にフランスに渡ってきたという。そして少女時代からポー地域で過ごし、同時期に定着を始めていたマヌーシュ家族集団に属する夫と結婚した。彼女の妹もまた、同じマヌーシュ家族集団の男性と結婚している。

3.3.2. 隠喩としての「血」の原則

このように、ポーのマヌーシュは、移動生活の時代から非マヌーシュ出自の人々と婚姻関係を結び、定住化の過程でさらに多様な人々と融合していった。その結果、今日彼らが形成している地縁共同体には、多くの非マヌーシュが吸収されている。なぜ吸収かというと、ポー地域には、非マヌーシュを主要な成員として構成されている家族集団が極めて少なく、地域に住む少数の非マヌーシュは圧倒的多数派であるマヌーシュとの結婚を通して、「ポーのマヌーシュ」という集団範疇の中に取り込まれているからである。

たとえば、調査地のマヌーシュは、「ジタン」、「ヒターノ」、「イエニツシュ」といったマヌーシュの血が流れていない親族について、筆者のような外部の人間からの出自に関する問いに答えて、「ああ、あれはマヌーシュじゃないよ」ということがある。非マヌーシュとマヌーシュの間に生まれた子を「純血のマヌーシュ pur(e) manouche ではない」と表現することもある。しかし、生来の言語や生活習慣の違いによって一応は差異があると認められていても、マヌーシュと親族関係にある非マヌーシュやその子が、日々の暮らしや社会生活においてマヌーシュから差異化されることはない。彼らは「ポーのマヌーシュ」の一員とみなされる。

同様に、定住民の配偶者や定住民との間に生まれた子も、「ポーのマヌーシュ」

という集団範疇の中に吸収される。ポー地域では、マヌーシュとの結婚を機にキャラヴァン居住をおこなうようになった定住民の多くが、マヌーシュの生きる社会的、経済的状况の中に編入している。マヌーシュ語能力には大きな個人差があるが、多数の定住民社会出身者は、マヌーシュと区別しがたいほどに、挨拶や身のこなし方、日常の社会関係もすべてマヌーシュ社会の中に完全に同化している。定住民の男性は、定住民社会で雇用の職につくのではなく、マヌーシュの親族と共にスクラップ収集や季節労働などの経済活動をおこなう。一方、定住民の女性の場合、マヌーシュの義母と義理の姉妹の協力を受けながら子を育てる。彼らはマヌーシュと結婚し、マヌーシュ配偶者の親キョウダイのもとでキャラヴァンに住まうようになり、仲間の一人として受け入れられる。そして次第にマヌーシュ語を理解し、マヌーシュの子の親となる。時に筆者のような外部者からの問いによって、「彼／彼女は定住民だ」と周囲から指摘され、自身でもそのように名乗ることはあっても、その点で共同体の中で非ジプシーである彼ら自身やその家族たちが差別されることはない。マヌーシュたちに囲まれて育つ子どもの場合はもっと単純で、子どもたちのあいだで片方の親が定住民であることは何の差異ももたらさない。

ただし、「昔、マヌーシュの女は、定住民男性 *gadjo* と結婚することは許されなかった」とマヌーシュの年配者たちが語るように、非ジプシーの定住民との結婚には一定の規制があったことを指摘しておかなければならない。多くのジプシー研究者も同様に、定住民男性とジプシー女性の間の婚姻規制について報告しており、このなかで、イギリスの人類学者オークリーやアメリカの人類学者サザーランドは、ジプシーたちが定住民との結婚を避ける理由には、「穢れ」のタブーと性に関する観念が関わっていると指摘している [オークリー 1986; Sutherland 1986]。定住民は男も女も穢れており、特に定住民男性は、自集団の「清浄性」を守る存在であるジプシー女性に対して危険な性的汚染を及ぼす可能性があると考えられているがゆえに、ジプシー社会にとって危険な対象とみなされるというのである。

これに対して、マヌーシュ研究の領域では、不浄信仰の問題は主要なテーマとして論じられてはこなかった¹³。現代のポー地域のマヌーシュについて筆者がおこなった調査の範囲でも、不浄信仰の存続を示すような具体的事例をみいだすことはできなかった。定住民との結婚を「穢れ」という観点から否定する語りや態度に出会うこともなかった。周囲の家族、特に親たちが自分の子が定住民と結婚するとき気にかけるのは、結婚後の夫婦の居住地選択や親族同士の付き合いがどうなるのか、そしてマヌーシュ社会にうまく定住民社会出身の配偶者が溶け込めるか、また反対にマヌーシュの子が定住民社会で受け入れられるのかといった、定住民とマヌーシュの間の社会関係や文化的差異の問題についてである。たとえば、調査地のマヌーシュ女性が、フランス領ニューカレドニア出身の定住民男性と結婚したと

き、その母親は次のように娘の結婚に対する心境を語った。「娘が彼と遠くにいてしまうのかと思い、最初は不安だった。けれど、ここにいてくれるのだもの、いままでは良かったと思うわ。」定住民の夫は、結婚前から地域のマヌーシュと交流を深め、この二人の結婚式は、マヌーシュの暮らす居住地内部で、マヌーシュの親族や仲間の立会いのもとおこなわれた。

ここで注目すべき点は、マヌーシュが、日々の生活の中で結ばれる具体的な社会関係に基づいて、非マヌーシュの他者を「ポーのマヌーシュ」共同体内部に受容していることである。もちろん、出自は帰属を決定する上で重要である。ある人間がマヌーシュであるかそうでないかという判定に関して、マヌーシュの人々は「マヌーシュの血」が流れているかどうかにもまず注目し、原則として両親のどちらかがマヌーシュであればその子はマヌーシュであるとされる。「マヌーシュの血」は、彼らの帰属が生まれた時点ですでに与えられたものであり、親がマヌーシュであるという生得権に帰するものである。また、マヌーシュはしばしば「私たちの種 *notre race*」というようにフランス語の「人種」という言葉を多用するが、ここでも生物学的なイメージによって自集団を差異化していることが確認できる。しかし、この「血」や「人種」といった純粋な生物学的基準にみえる概念は、オークリーが指摘するように、「個人の遺伝のことを文字通りいっているのではな」く、「社会的なカテゴリーをあらわす隠喩」[オークリー 1986: 130-131]なのだといえる。

たとえば、定住民と結婚したマヌーシュが、マヌーシュ親族との付き合いを絶ち、マヌーシュの出自を隠して定住民社会で暮らしているならば、そのマヌーシュも、そしてその子ももはやマヌーシュではないといわれる。対して、他のジプシー／移動生活者集団出身者、もしくは定住民であれ、非マヌーシュ出自の人間が、マヌーシュの配偶者を持ち、マヌーシュの家族と共に生活する限り、彼／彼女は、マヌーシュ社会の一員としてみなされるし、非マヌーシュとの間に生まれた子はマヌーシュの祖父母やイトコなどの親族に囲まれてマヌーシュ社会の中で育つことで、マヌーシュとして認識される。「マヌーシュの血」という概念は、マヌーシュ社会の中で暮らし、マヌーシュとして育つことという、振舞い方や生活のあり方すべてを包摂する社会的、文化的な概念が重ねあわされ、非常に柔軟性に富むものとなっているのだ。

こうした隠喩としての血の原則が、個別具体的な社会関係に応じて、非マヌーシュの他者を「ポーのマヌーシュ」という独自の集団範疇のなかに受容することを可能にしているといえるだろう。マヌーシュの地縁共同体は、「ポーのマヌーシュ」という境界を規定しながらも、同質で固定的なアイデンティティに依拠することなく、新たな生活状況の下で出会う様々な他者との関係性を含み込みながらつくりあげられていったのである。

冒頭に挙げた松田は、自身のフィールドであるナイロビのマラゴリ民族共同体の事例から、人々が「共同体の外延（境界）」を保持しながらも、「生活の必要性」に応じて社会関係を拡張し、柔軟に異民族の人間を取り込む文化実践をおこなっていることを報告している。そして、こうした外延をもち成員に連帯を呼びかけながら、内部を変異させる性向こそが生活世界において構築される共同体の最大の特質であると指摘する〔松田 2004: 262-263〕。同様の特徴がマヌーシュ共同体にもみられる。マヌーシュは、隠喩としての血の原則を通して、「ポーのマヌーシュ共同体」という外延を維持しつつ、生活の場を共にする他者にメンバーシップを開放してきた。「マヌーシュ」と呼ばれ、そう自称する人々によって形成されたこの共同体は、他者を排除し境界を閉じるのではなく、生活状況に応じて柔軟に他者を集団内部に受容する婚姻実践を通して、定住民、そして、ジプシー研究上異なった下位集団に属するジプシー／移動生活者といった外部の人間を共同体の中に内包しながら、定住化をめぐる社会変化の中で新たに構築されたのである。

以上、ポー地域に定着したマヌーシュ家族が、生活のありようを大きく変化させてきた時代に、旧来の親族ネットワークの外部にいる様々な人々との共住を経験し、地縁共同体を構築した過程を述べてきた。駆け落ち婚の事例は、マヌーシュが、定住化に伴う生活条件の変化とそこで新たに結ばれた社会関係に基づいて、親族外のマヌーシュだけではなく、非マヌーシュを「ファミリア」の中に取り込み、民族境界を柔軟に調整しながら、「ポーのマヌーシュ」という独自の集団範疇をつくりあげてきたことを示している。ここに日常の生活条件に応じて集団の枠組みを動的に編成していく「柔軟性の原理」をみてとることができる。移動生活の時代から持続する集団編成の原理が、定住化をめぐる新たな社会的環境に対応することで、従来の親族関係を越えた社会関係が創出され、地域的な共同性が育まれたのである。

4. マヌーシュ共同体の動態

今日、マヌーシュの人々は地域内に分散して暮らしながらも、互いに互いを「ファミリア」と呼び合う。長年同じ地域に定着しそこで関係を結んでいった人々の社会生活では、個々人を血縁・婚姻関係により厳密に位置づけていく必要性がみられないほどに親族関係も広がっている。居住地が離れていたり、遠い親族関係にあたりする人々とは、日常的に顔を合わせることはなくとも、電話や人聞きによって頻繁に情報交換をする。そして結婚や葬儀の折に、地域内の人々は集結する。とりわ

け、死者に最後の別れをすることは、マヌーシュが最も重要視する社会的義務であり、通夜の際には、地域中のマヌーシュが一同にそろろう。マヌーシュの葬儀には、フランス各地、遠方からも多くの親族が訪れるが、地域内に暮らすマヌーシュは、親族関係の有無や遠近にかかわらず、死者が眠るキャラヴァンのもとに集い、埋葬までのひと時を近親遺族と共に過ごす。地縁共同体において、通夜は、普段めったに会うことのない、異なる居住地に住み異なる親族集団に属す人々が集い、共同体の一員としてその結びつきを意識し表明する重要な機会である。

このように彼らは、定住化という新たな社会的環境の下でキャラヴァン居住を営むことを通して地縁関係を創出し、共に住まい集うという経験を積み重ねることによって共同性を育んできた。しかしその一方で、日常の生活の場においてかたちづくられてきたこの共同体は、現在もなお変化し続けているということも指摘しておかなければならない。

4.1. 進行する社会変化と共同性の軋み

マヌーシュの地縁共同体は、成員の固定化をもたらす社会制度や秩序だった集団の組織化に基づいて形成されたものではなかった。婚姻制度からもみてきたように、この共同体は成員の出入りに関して厳密な定義のある社会構造の上に形成されたものではなく、さらにその形成の過程に、社会的条件から自立的な集団編成の原理や個人や個々の家族の「戦略」¹⁴と呼べるような行動の主體的側面や帰属意識をみてとることは難しい。むしろ、共同体構築の内的要因として、集団を固定化せずに、異なった親族間ないしは民族集団間の融合を可能とする状況適応的で柔軟なマヌーシュの集団編成の原理があるのだ。

しかし、流動的な結合の可能性は、他方で分散の可能性とも結びつく。マヌーシュの集団編成の「柔軟性の原理」は、生活条件に応じて集団の枠組みを変化させるものであった。こうした原理によりながらマヌーシュの地縁共同体は、日常の具体性に沿って生活の場からたちあげられていったのであり、それがゆえに、キャラヴァン居住をめぐる生活条件が変わりゆく現在の状況においても、固定化されることなく揺れ動きつづけているのである。

たとえば、共住の経験により密接な社会関係で結ばれているにもかかわらず、1996年にSC集合宿営地が解体されると、マヌーシュ家族はそれぞれに旧来の関係に基づく親族集団のまとまりに分かれて、新たに建設された地域内の集合宿営地、あるいは私有地や空き地に分散していった。マヌーシュは依然として近親集団の団結を重視し、居住地の違いによって社会関係の濃淡も大きい。結婚と葬儀を除くと、遠縁や居住地が異なる家族集団と交流する機会は限られる。地域内に散在する居住地は地理的にはそれほど離れていないが、利用できる交通手段を欠くため、若者同

士の日常的な交流も制限される。したがって駆け落ち婚によって、共同体内部の家族間関係が居住地を中心とした日常の生活空間を越えて強化されることが少なくなり、遠い親族関係にありなおかつ居住地を別にする人々との関係性はより希薄化していることがみうけられる。同時に関係性の希薄化だけでなく、日常生活における様々な側面における差異化も進んでいる。公営の集合宿営地に住むマヌーシュ家族もいれば、不法占拠地や家屋付きの私有地に住む家族もいるといったように、キャラヴァン居住をめぐる生活条件が多様化している。移動生活の有無や内容、移動に伴う経済活動と経済状況は家族集団ごとに異なり、生活レベルに違いも生じている。

だが、このような共同体内部の関係の希薄化と差異化の進む状況には、居住地の違いや親族関係の遠近だけが関わっているのではない。同じ居住地に住む家族の間や、近親集団内部でも、生活内容や価値基準が多様化しており、居住地の使用法や日々の暮らしぶりにまつわる家族間の対立や不和が恒常的にみられる。マヌーシュの地縁共同体は、定住化という状況において地域的な共同性を育んできた。しかしその一方で、移動の自由が制限されることによって、マヌーシュの社会生活には軋みが生じているのだ。

かつて、マヌーシュは移動することで、集団編成を柔軟に変化させていた。移動は、共同体内部の争いを調停する政治的組織をもたないマヌーシュ社会において、家族集団間の対立関係の解消手段としてもっとも一般的な方法であった¹⁵。たとえば、ある二家族集団間に不和が生じると、それが衝突へと発展する前に、どちらか一方の家族集団が移動を再開し、物理的な分離をはかる。そうすることによって、社会関係の緊張が緩和され、諍いが未然に防止されていたのである。このような社会関係の悪化に対する敏感な対応策、現実的な衝突を未然に防ぐ行動規範として実行されていた移動が、長期的で安定的な定着の地を必要とする現代のマヌーシュ家族にとって困難な選択となっている。さらに今日、集合宿営地や不法占拠地では、複数の拡大家族からなる大人数が恒常的な人口過密状態のなかで混住している。マヌーシュの暮らしは、定住化により、慣れ親しんだ家族と旅を続ける生活から、親族関係の遠近や関係の好悪様々な雑多な大集団で一定の土地を共有し定着しなければならない生活へと大きく変化したのであり、そのことが、人々に忍耐や緊張といった社会的ストレスを与えるものとなっているのだ。そこから、それぞれの家族の専有区画の位置取りや、自らの居住区画への親族の呼び寄せといった宿営地の利用法をめぐる対立、狭い居住地のなかで日常的に生活の細部を共有することから生じてくる人間関係のもつれなど、多くの問題が次々とたちあられることになる。

4.2. 地縁共同体内部と外部に広がる複数の関係性

こうした状況下、調査地のマヌーシュのあいだでは、大集団で共住する集合宿営

地ではなく、個々の家族集団単位で専有し個別性の高い生活を送ることのできる私有地を望む声が高まっている。筆者は、長年にわたり一つの居住地に住み、そこで複数の共住するマヌーシュ家族と安定した社会関係を結んできた家族が、「(集合宿営地ではなく)私たちだけの土地がほしい」と語る様子に幾度も遭遇した¹⁶。マヌーシュの人々は、「私たちは皆ファミリア」と述べ、「ポーのマヌーシュ」という共同体的まとまりを表現する。しかしその一方で、「私たちは皆同じではない」、「私たちはいつもひつつきあっているのではない」といって、個々の家族や家族集団の個別性を重視し、自律的に行動しようとする。

実際には私有地への移住は、土地の不足や経済的な事情から実現が難しいのだが、一年のうち数週間から数か月の間、別の土地で生活を営むマヌーシュ家族の数は少なくない。これらの家族は、いつでも戻ってくるができるように、集合宿営地に家族専有の宿営区画を保持したまま移動生活に出かけ、ポー地域内の空き地を転々と移動しながら暮らす親族や仲間、さらにはポー地域外の地域に定着している親族のもとへと合流し、一時的に彼らと共住し行動を共にする。そうすることによって彼らは、集合宿営地での集住状況において窮屈になりがちな社会関係を調整すると同時に、普段は別々の土地や地域に暮らす親族や仲間との連帯を維持するのである。

このように定着地との結びつきを保ったまま移動生活をおこなうという、定住化の時代における新たな居住実践を通して、マヌーシュ家族は、複数的で重層的な社会関係を育む。一つの事例をみてみよう。ある50代のマヌーシュ夫婦は、ボルドー地方での秋の葡萄収穫の季節労働を終えた後の冬季、彼らの既婚の息子夫婦3組と未婚の子2人とともに、夫の両親と姉妹の家族が住むポー地域の集合宿営地でキャラヴァンを並べて暮らす。3人の既婚の息子たちは皆、ポー地域で共住するまで面識のなかったマヌーシュ家族の娘たちと結婚しており、集合宿営地にはこれら義理の娘の親族も共住する。こうしてこのマヌーシュ夫婦とその家族は、集合宿営地で、夫の親族関係と既婚の子を通じた地縁関係の結びつきの中に暮らしているが、彼らの社会関係はそれらに限定されるのではない。春先になると、夫婦は未婚の子のみを連れてこの集合宿営地を出ていく。そして彼らは、ポー地域内の空き地で一年を通して野営を続ける妻の両親と兄弟姉妹が構成する家族集団に合流し、夏の間も共に行動し、夫と妻双方の親族が暮らすマルセイユを中心に南仏地域を移動して暮らす。集合宿営地に残る3組の息子夫婦は、南仏へと向かうこの夏季の移動生活、さらに秋の葡萄収穫に同行することもあればしないこともある。

この事例からは、移動と定着というマヌーシュ家族の一年の生活を構成する二つの時期において、彼らの帰属集団が変化している様子がみてとれるだろう。夫と妻双方の遠方ないしは近隣の親族関係、子の結婚を通して発展した定着地における地

縁関係という、複数の新旧様々な関係性が、その都度の生活状況に応じて選ばれ、時に複合的に重ねあわされている。調査地では、この家族のように、春から秋までの長期的間、活発な移動生活をおくるマヌーシュ家族の数は減少している。しかし先に述べたように、一年の大半をポー地域に定着して過ごす家族でも、近隣遠方を問わず旧来の親族関係を維持し、再会のための移動をおこなう。マヌーシュ家族にとって、地縁共同体と血縁共同体のいずれも、その内部で社会関係が固定される唯一の帰属先になりえず、それらは相補的に彼らの生活を支えているのだ。

調査地のマヌーシュは、定住化をめぐる社会変化の中で、旧来の親族関係を越えた地域的な共同性を育んできたが、それは、「われわれ」、「ポーのマヌーシュ」という全体ないしは同一性への安易な傾倒や集団帰属の固定化へと結びつかない。彼らが「私たちの共同体」、「ポーのマヌーシュ」といって表す地縁共同体は、共同体の境界に関する一致した見解や、共同体内部の関係性を安定化ないしは強化する規範や制度をもっているわけではない。むしろこの共同体は、その内部に、個々の家族の個性や差異、旧来の血縁的紐帯や同一居住地住民間の連帯などの複数的な共同性を抱え込み、境界が常に揺れ動く社会的結びつきとして生きられている。

地縁共同体では、絶えず内部の社会関係の緊張や分散の可能性が生じているのである。こうした傾向は、これまでみてきたように、マヌーシュがその柔軟な集団編成の原理から、拡大家族集団やその一時的な集合体を越えた永続的な共同体を構成することがなかったことと関係していると考えることができる。マヌーシュの集団編成の原理においては、外的状況から自律的に働く社会組織の基礎条件やイデオロギー的な規範や拘束というものがいないために、個々の家族がそれぞれの生活条件に応じて柔軟に集団帰属を変えていく。そこで、共同体内部では個性や共同性の境界をめぐって絶えず緊張と葛藤が生じ、たやすく融合がおこなわれると同時に分離もおこなわれることになるのだ。マヌーシュの地縁共同体は、定住化の時代におけるキャラヴァン居住という経験の共有を通して構築され、人々の生活再編のために必要不可欠な存在となっていた。しかし、こうした日常的な経験の積み重ねから創出されていった人々の社会的結びつきは、あらかじめ存在していた同質性や共通性ではなく、新たな関係性と変容の可能性を抱え込みながら生活の場において様々なかたちでたちあがり、揺れ動き続ける共同性によって支えられているのである。

5. おわりに

第二次世界大戦後に始まる定住化の過程において、マヌーシュをはじめとする移動生活者の共同体をとりまく社会状況は大きく変化してきた。定住化の進行とともに

にキャラヴァンは不動化し、人々の生きる生活空間は縮小されていった。しかし、定住化の時代においてマヌーシュは、依然として持続する彼ら独自の集団編成の原理を通して、新たな共同体を構築した。マヌーシュの「ファミリア」概念は、第一義的には血縁集団として定義されながらも、集団の枠組みを固定せず、血縁から拡張する多様な人々との関係性をも含み込むものであった。そして、マヌーシュの婚姻実践は、社会組織の凝集性を固定し強化するような特定の婚姻規制も、排他的な集団加入の条件ももたず、日々更新される具体的な社会関係に柔軟に対応するものであった。

こうした状況適応的な集団編成を導く「柔軟性の原理」によりながら、マヌーシュは、定住化がもたらした新たな生活条件に対応して、地縁共同体をつくりあげていった。この地域的な共同性は、人々が定住化の時代にキャラヴァンに住まうなかで出会う他者と生活の場を共有し協同する経験を積み重ねることで紡ぎだされた。定住化の進行とともに、マヌーシュの人々は、移動生活のなかで離合集散する共同体のあり方を変化させながらも集団編成の原理を持続させ、新たな社会的条件下で新たな社会的結合を生み出してきたのである。そして、この過程で、彼らは、「ポーのマヌーシュ」という集団的範疇を、定着地での生活再編のために必要不可欠な社会的基盤として意味づけ規定しつつも、それを閉じることなく多様な他者を内に取り込んできた。「生活の場における実践の論理」とそこで結ばれる具体的な社会関係に基づいて、マヌーシュは、キャラヴァン居住という生活条件を同じくする様々な人々と融合しながら「閉じていながら開かれている」共同性を育んできたのである。地縁共同体は、「明確な境界（外延）をもち構成員に呼びかけを発しつつけるリアルな存在」[松田 2004: 263]として社会変化を生きる人々の暮らしを支えてきたといえる。

しかし他方で、この共同体は、今日においても彼らを取り巻く社会状況が急激に変化しつつける中で、共同体内部の社会関係を固定化することなく分散と変容の可能性を恒常的に抱えていた。定住民社会でも、近代以降そして現代においてますます加速されたように、血縁や地縁に基づく伝統的な共同体が解体され、個人を単位とする社会が形成されたといわれてきた。だが、本来、マヌーシュが定住民社会の共同体に属することなく、柔軟性と動態性に富む集団編成によって特徴づけられた共同体に生きる人々であったことを考慮すると、マヌーシュの地縁共同体の現状を、定住民社会の「現代社会において危機に瀕する共同体」が迎ってきた変容と完全に同一視することは不適切である。

マヌーシュは、共同体内部の個々の家族に高い自律性を認めることで、全体に柔軟性と流動性を与え、ゆるやかな共同体的まとまりを保持してきた。移動生活の時代から持続し、地縁共同体の構築にもかかわった「柔軟性の原理」は、集団の枠

組みを固定化するのではなく、状況適応的な柔軟性に基づき、生活の必要に応じて変化させていくのである。こうした原理によりながら、マヌーシュは、日々の生活をめぐる現実の社会的条件のもとで様々な人々と融合したり分離したりすることで、個々の家族の生活とそれを取りまく共同体の変化適応力を維持してきたのだといえる。つまり、移動の中で生活と社会をつくってきたマヌーシュの人々が依拠する集団編成の原理が、共同体の固定化を阻む側面をそなえているのである。そしてそれがゆえに、マヌーシュの地縁共同体は、今日も変化し続けるキャラヴァン居住の生活条件に対応して、絶えず共同体内外の社会関係を更新し、その都度様々な境界をつくりだしていく。こうした同一性ではなく、流動的で異質性や緊張関係を抱え込んだ共同体は、「リアリティをその都度有しながら固定されない」[小田 2004: 245]、「変異する共同体」[松田 2004]といえるだろう。定住化の時代において構築された「ポーのマヌーシュ共同体」という新たな社会的枠組みは、進行する社会変化の中でおこなわれるキャラヴァン居住の実践を通して、絶えず揺れ動き更新されていくのだ。

本論文の骨子は、2010年6月に埼玉で開催された第44回日本文化人類学会で報告したものである。執筆にあたっては、筑波大学の山口恵里子先生と査読者の先生から、細やかな指導と有意義な批評、助言をいただいた。また、記述のもととなった調査は、2008-2009年度給費留学生として、フランス政府から支援をいただいた。ここに記して感謝の意を示します。

注

¹ 共同体概念再考の動きと密接にかかわる議論として、レイヴとウエンガー [1993] や田辺 [2003] による「実践コミュニティ」の議論、「社会空間」[西井 2006] や「エイジェントと共同性」[田中 2006] をめぐる一連の議論も重要である。

² ここで小田は、「非同一的な共同性」という言葉を大杉 [2001] から援用している。

³ 本論文の記述は、筆者が2006年夏の事前調査を経て2007年9月から2009年7月の間に、断続的に約24ヶ月おこなったフィールドワークに基づく。調査地のマヌーシュは、日常的にマヌーシュ語とフランス語を話す。本論文では、マヌーシュ語をはじめとするジプシーの諸言語は、フランス語と区別して斜体で記す。調査地のマヌーシュがおこなう移動生活は、家族行事（冠婚葬礼に際する親族訪問）、経済活動（主に葡萄収穫などの季節的農作業）、宗教活動（カトリックの巡礼、あるいはプロテスタント・ペンテコステ派集会への参加）を主要な目的とし、期間は春から秋にかけての数週間から3ヶ月程度である。一年の大半を暮らす定着地では、多くのマヌーシュ家族がスクラップ収集の経済活動をおこなっているが、生計は国の社会保障給付に依存している。

⁴ 本論文ではポー地域と呼ぶが、正確には、フランス南西部に位置する、ピレネー＝アトランティック県の県庁所在地ポーを中心として近隣の市町村を含めた「ポー都市圏共同体 *communauté d'agglomération Pau Pyrénées*」を指している。

⁵ ベルギーのシンテは、フランスのマヌーシュと同様に、19世紀中頃までアルザス＝ロレーヌ地方を中心としたドイツ語圏地域に暮らし、その歴史的、地理的背景のみならず、現在使用されている言語についてもマヌーシュと非常に近接している。フランスのジプシー研究では、時代をさかのぼれば同一の集団であると推測されているため、一般的にマヌーシュとして同定されている。

⁶ 「ガジェ *gadje*」とは、非ジプシーの「定住民」や「農民」を意味するマヌーシュ語である。男性単数は「ガジョ *gadjo*」、女性単数は「ガジ *gadji*」となる。

⁷ こうした臨機応変的な居住集団の選択については、イングランドのジプシーを調査したオークリーも同様の指摘をしている [オークリー 1986: 283]。

⁸ 南フランス一帯ではジタンが都市のアパルトマンに住み、「カルティエ・ジタン」と呼ばれるような一つの街区に集住している。彼らは、キャラヴァンに暮らすマヌーシュと接触することなく独立した共同体を形成している [Eberstadt 2007; Olive 2003]。また、パリ圏では、ロマ家族集団が集合して共同体を築いている [Williams 1984]。筆者は、本調査と同時期に、ポー地域と地理的に近接するバスク地方のマヌーシュ共同体でも短期調査をおこなったが、そこでもマヌーシュ、ロマ、ジタンそれぞれの集団ごとに居住地が異なり、異集団間で結ばれる婚姻関係もみられなかった。

⁹ 駆け落ち婚については別稿 [Sachi-Noro 2010] で、通過儀礼論を参照しながら考察している。

¹⁰ 第一イトコ同士の結婚は40代以上の親や祖父母世代においては実際に頻繁に生じており、禁止されているわけではない。だが、現在ではキョウダイ関係のようにあまりにも近い関係としてみなされ、結婚の成立は少ない。

¹¹ 調査地のマヌーシュの話すマヌーシュ語には、インドのサンスクリット語やギリシア語の語彙のほかにドイツ語の語彙が多く含まれ、彼らの多くはドイツ系の苗字を名乗る。調査地のマヌーシュ家族も祖父母から聞いた話として、自分たちは「アルザス出身だ」、「ドイツからやってきた」というので、彼らは同じ時代に同じ地域で過ごした同集団から派生したと考えることができる。しかし、読み書きをせず、もっぱら口承によって記憶を受け継ぐマヌーシュ社会において、地理的な出自を先祖代々さかのぼって記憶している人はほとんどいない。

¹² イェニツシュの起源については、30年戦争の混乱のさなかに街道に投げ出された農民や兵士、ユダヤ人、ジプシーといった人々が混合した集団だという説があるが、正確な起源はわかっていない [Bader 2007]。

¹³ ただし、ドエールが、幼少時代にマヌーシュの長老から伝え聞いた話として、過去の時代にマヌーシュが保持していたいくつかの社会的、性的規範について述べていることは注目に値する。ここでは、明確にマヌーシュ女性とガジェとの性関係の禁止が指摘されており [Doerr 1982: 68]、さらに他の禁止事項もまた、オークリーがイギリスのジプシー集団においてみだした穢れにまつわるタブーと重なり合う。したがって、このような規範が影響力をもっていた過去の時代のマヌーシュ社会においては、穢れのタブーと婚姻規制の関係性は説

得力をもったといえるだろう。

¹⁴ ウィリアムは「戦略 *stratégie*」という概念を用いて、ロム共同体における家族間関係の相互性や平等性を重視した個人や個々の家族の主体的な帰属選択を強調している [Williams 1984]。

¹⁵ ドレは次のように述べている。「マヌーシュは諍いの勃発を避ける。つまりこの場合（諍いから）逃げる手段をとる。マヌーシュはキャラヴァンを出発させ、別の場所に移っていくのである」 [Dollé 1980: 71]。

¹⁶ 「私たちだけの土地」とは、「家族用地」と呼ばれるキャラヴァン居住者のための私有地を指している。家族用地については別稿 [左地 (野呂) 2011] で論じている。

参考文献

- Bader, Christian. 2007 *Yéniches : Les derniers nomades d'Europe*, Paris: L'Harmattan.
- Département des Pyrénées-Atlantiques. 2003 *Schéma départemental d'accueil et de l'habitat des gens du voyage*: approuvé le 19 novembre par le Préfet du Département des Pyrénées-Atlantiques et le Président du Conseil Général des Pyrénées-Atlantiques.
- Doerr, Joseph. 1982 *Où vas-tu, Manouche ? : vie et moeurs d'un peuple libre*, Châteauneuf-les-Martigues: Editions Wallada.
- Dollé, Marie Paul. 1980 *Les Tsiganes Manouche*, Sand: 未公刊 .
- Eberstadt, Fernanda. 2007 *Le Chant des gitans. A la rencontre d'une culture dans le sud de la France*, Paris: collection Latitudes.
- Olive, Jean-Louis. 2003 'Approche discrète d'un anthropologue au seuil de l'altérité. Conjugalité et parentalité, famille et communauté, le dedans et le dehors du monde gitan', *Spirale* 26: Pp.29-63.
- Omori, Yasuhiro. 1977 'L'utilisation de l'espace chez les Manouches', Thèse de doctorat: Paris X.
- Reyniers, Alain. 1992 'La roue et la pierre : contribution anthropo-historique à la connaissance de la production sociale et économique des Tsiganes', Thèse de doctorat: Université de Paris V. 1998 'Le souci de soi, ou la pérennité d'une communauté tsigane', *Etude Tsiganes* 11: Pp.116-124.
- Sachi-Noro, Ryoko. 2010 'Chacun a sa caravane : L'habitat caravane et l'organisation sociale chez les Manouches semi-sédentaires ou sédentaires dans la région paloise', *Journal des anthropologues* 120-121 : Pp.399-416.
- Sutherland, Anne. 1986 *Gypsies: the hidden Americans*, Illinois: Waveland Press.
- Williams, Patrick. 1984 *Mariage tsigane, une cérémonie de fiançaille chez les Rom de Paris*, Paris: L'Harmattan.
- レイヴ、L / E・ウェンガー 1993 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』佐伯胖訳、産業図書。

- 小田 亮 2004 「共同体という概念の脱／再構築：序にかえて」『文化人類学』69 卷 2 号、236-246 頁。
- オークリー、J 1986 『旅するジプシーの人類学』木内信敬訳、晶文社。
- 大杉高司 2001 「非同一性による共同性へ／において」杉島敬志編『人類学的実践の再構築—ポストコロニアル転回以降』世界思想社、271-296 頁。
- 左地（野呂）亮子 2011 「定住化の時代における生活空間の再構築—フランス南西部に暮らすマヌーシュの家族用地の事例を中心に」『文化交流論研究』6 号、1-25 頁。
- 田辺繁治 2003 『生き方の人類学—実践とは何か』講談社現代新書。
- 田中雅一 2006 「序論 ミクロ人類学の課題」田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の実践—エイジェンシー／ネットワーク／身体』世界思想社、1-37 頁。
- 松田素二 2004 「変異する共同体—創発的連帯論を超えて」『文化人類学』69(2)、247-270 頁。
- 西井涼子 2006 「社会空間の人類学—マテリアリティ、主体、モダニティ」西井涼子・田辺繁治編『社会空間の人類学—マテリアリティ、主体、モダニティ』世界思想社、1-29 頁。